

東大和市の生い立ち

(2003. 5. 20. 新堀公民館)

I 海の中

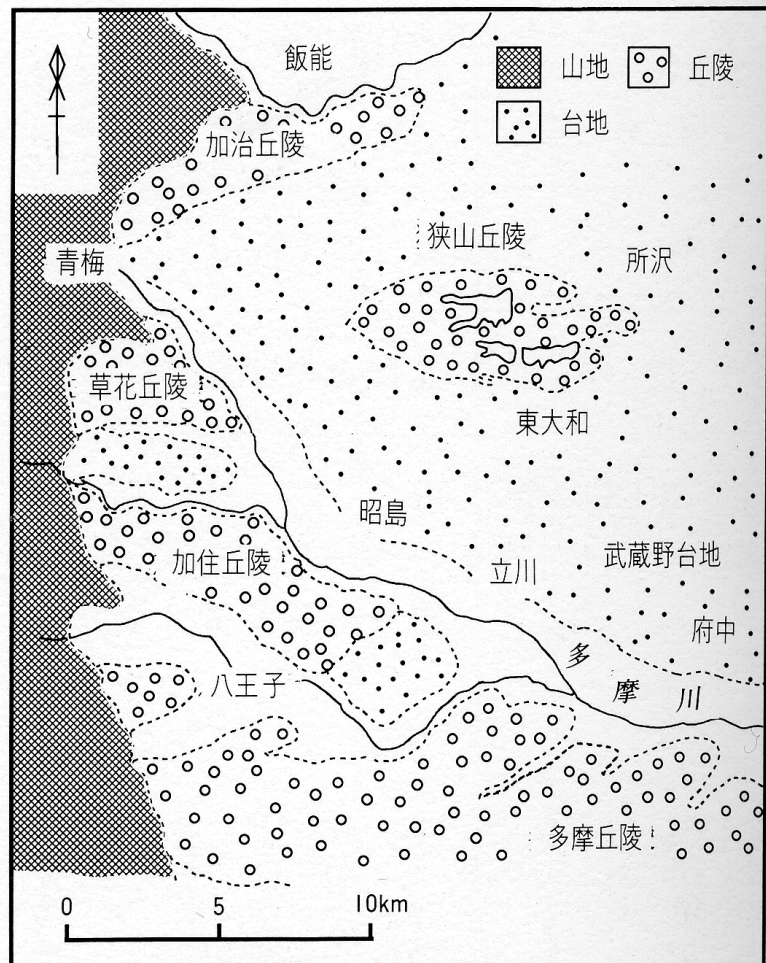


図1 関東平野西部の地形

東大和市史資料編5 p 25



昭島クジラの発掘地



関東地方が海の底であった頃、昭島市あたりには鯨が泳いでいた。上日野サメ 下日野クジラ

昭島市の多摩川べりでクジラの骨、日野市でも鯨の骨とサメの骨が発見されています。

狭山丘陵の辺りが渚になった

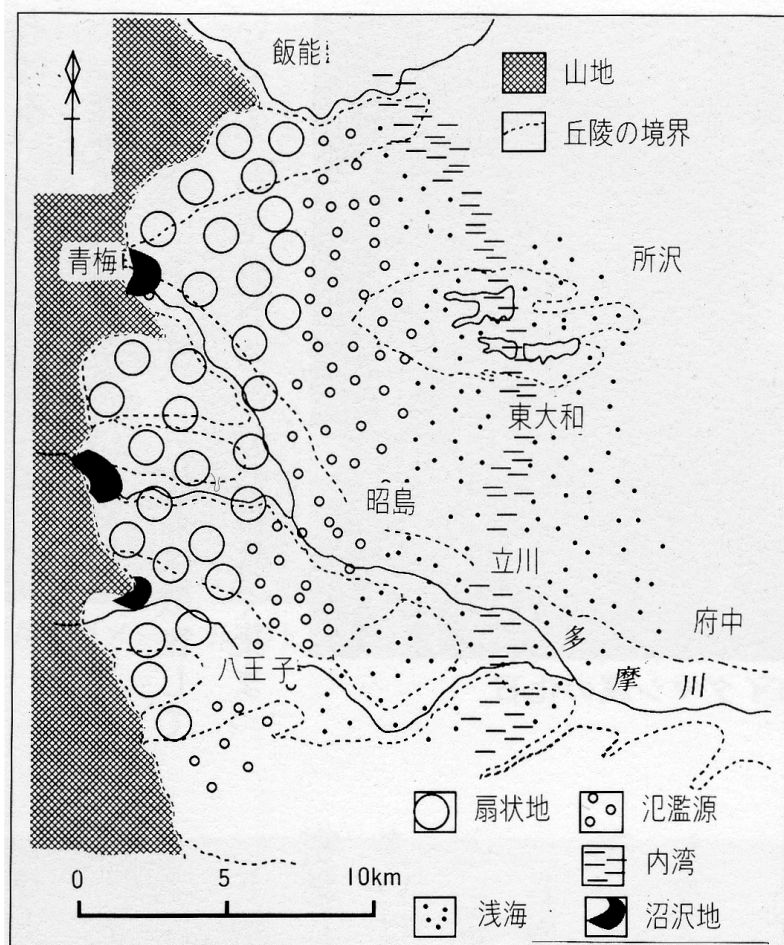


図8 関東平野西部の昔の様子
(50～200万年前)

(東大和市史資料編5 狭山丘陵と生きものたち p 36)

- ・東大和市では多摩湖で海水性の貝の化石を発見しました。
- ・植物は「メタセコイヤ」や「オオバタグルミ」などが繁茂し、そこに「アケボノゾウ」が生育していました。

「メタセコイヤ」や「オオバタグルミ」などの化石は狭山市、入間市、武蔵村山市、昭島市、日野市で発見され、「アケボノゾウ」の化石は、狭山市、入間市、福生市、昭島市、日野市で発見されています。「アケボノゾウ」の足跡は入間市博物館、復元は狭山市博物館に展示されています。

Ⅱ 狭山丘陵と武蔵野台地ができた

約50万年～30万年前、海水面は後退し渚はなくなり、扇状地（三角州）の形成が進みました。そこに

- ①青梅市の位置を出口として、多摩川などの河川が流れ、砂礫や粘土を堆積した。
- ②河川の浸食作用が進み、丘陵の原型ができた。

狭山丘陵 草花丘陵（多摩川南岸）加住丘陵 多摩丘陵 加治丘陵（霞川の北岸）

- ①火山灰が降り「多摩ローム層」ができた。武蔵野台地の原型ができた



カキの貝殻 多摩湖で発見

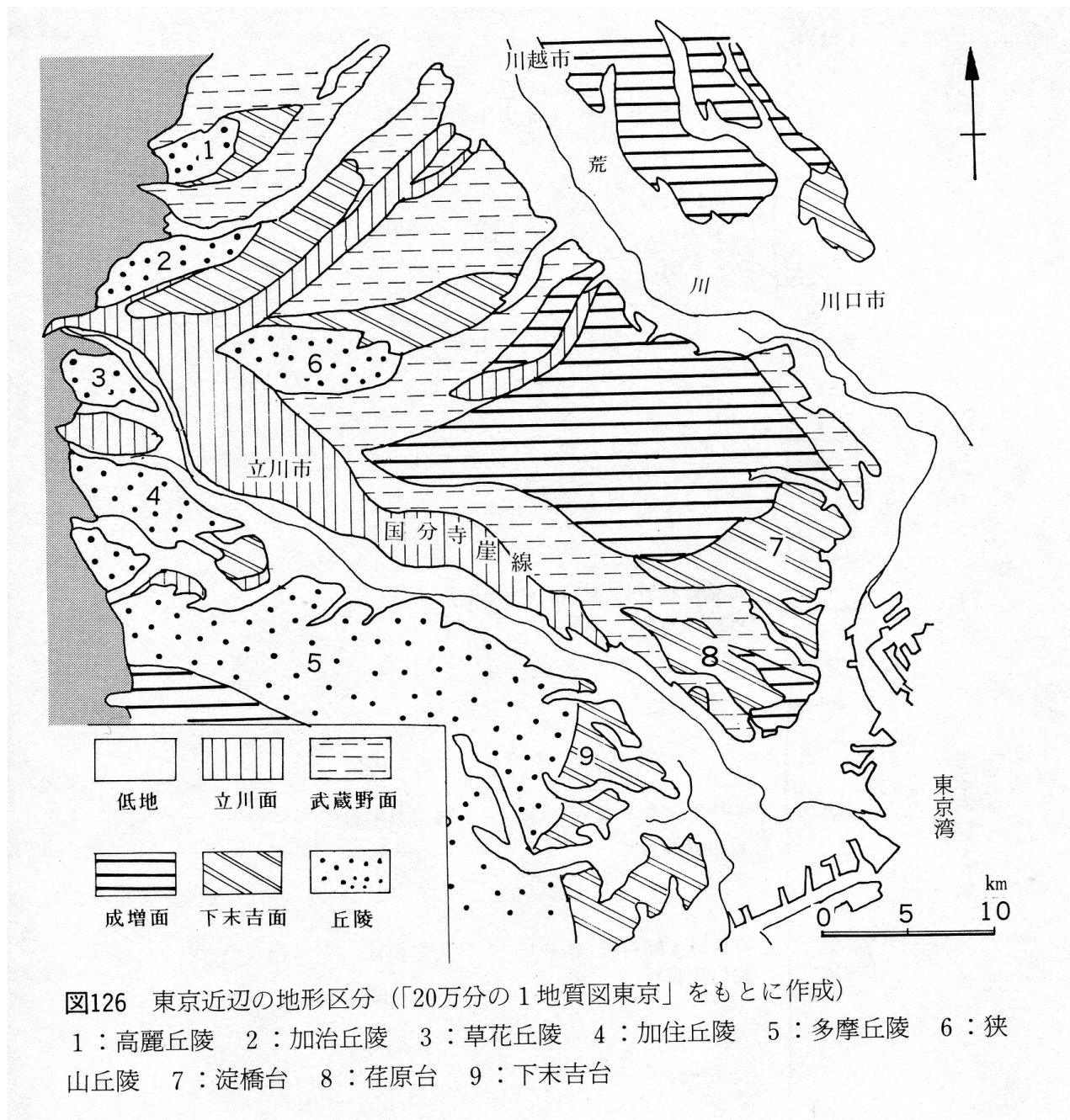


メタセコイヤ 多摩川で発見



- 「多摩ローム層」の下に芋窪礫層がある。
- ④さらに多摩川が移った→崖線ができた。(国分寺崖線 府中崖線)
移ったあとに火山灰が降った(4回)。

東大和の原型ができた(東京周辺の地形図)



(大森昌衛監修 東京の自然をたずねて p 207)

- ・東大和市域の原型ができました。それは狭山丘陵と南に広がる台地で形成されます。この地形はその後の歴史に大きく作用しました。
- ・多摩川は丘陵だけでなく、国分寺市や府中市などに大きな削り跡を残しました。国分寺崖線、府中崖線と呼ばれます。この崖線は特有の歴史を伝えます。

Ⅲ 人が住み始めた

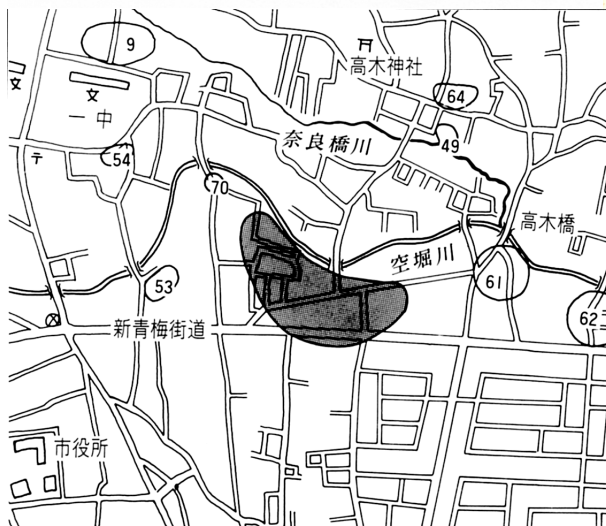
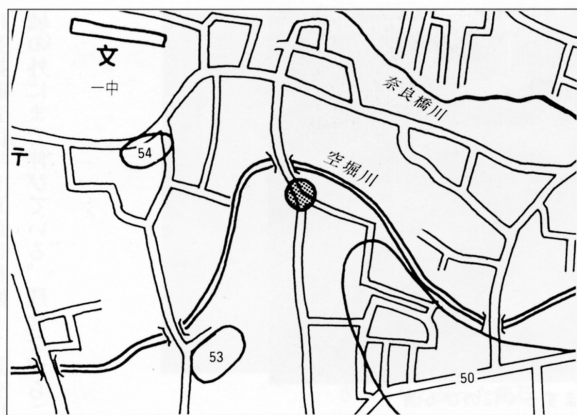
最初の住人（旧石器時代＝先土器時代）

- ①多摩川が移動したあとに箱根の山や八ヶ岳が噴火して、火山灰が降りました（2～5万年前）。
- ②武蔵野台地に、ヒトが住み始めました。赤土（ローム）の中。



まだ、土器をつくらなかったようで、石器や棍棒が主な道具でありました。
東大和市では、市内最古のものとして、約1万5千年から2万年前と考えられる石器（左）が貯水池の中で発見されています。右は清水神社近くの上ノ台遺跡で発見された「大型槍先型尖頭器」

第一中学校の南に位置する丸山遺跡（2万年～1万5千年前）では、「集石遺構」と呼ばれる、図



のように焼けた石がまとまって出土しました。石焼き、蒸し焼きなどの調理道具に使われたと考えられています。暖房との説もあります。

丸山遺跡から東南に位置する街道内遺跡では旧石器から縄文時代にかけての遺物が発見されています。東大和市史資料編 3 発掘された先人の暮らし p 86 では

『遺物の観察から、この遺跡が先土器時代から縄文時代草創期、早期、前期、中期、後期と長い時間にわたって営まれたものであることがわかった。また、地形的にも空堀川南岸に位置し、

発見されている遺跡のほとんどが空堀川の近くにあります。小平市では、石神井川の源流に鈴木遺跡があり、3万年前と推定され、現時点では、東京都の最古の遺跡とされます。

- ・ 気候が温暖化し氷河時代が終わった（1 万年前～6 0 0 0 年前）。
- ・ 氷河が解け海水が増え、海面が上昇した。ピーク時は現在より 4 メートル以上高い。
- ・ 埼玉県の大宮まで海が入り込み、後に縄文人が貝塚を作った。
- ・ 多摩川にサケが遡上した（あきるの市 前田耕地遺跡）。

- 5 -



縄文時代晩期の遺跡分布

縄文時代の時代区分

普通縄文時代は次のように時代を区分します（1万年を6期に区分）。

草創期 約1万2000年前～1万、あるいは、9000年前

旧石器時代から縄文時代への移行期

早期 約1万0000年前～6000年前 中身の整備の時期

前期 約6000年前～5000年前 中身が豊かになってきた

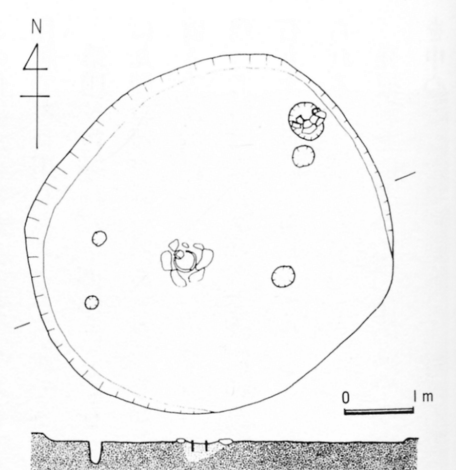
中期 約5000年前～4000年前 最盛期

後期 約4000年前～3000年前 次第に衰退する時期

晩期 約3000年前～2300年前 次の弥生時代への移行期



I号住の石囲炉



諏訪山遺跡第I号住居跡

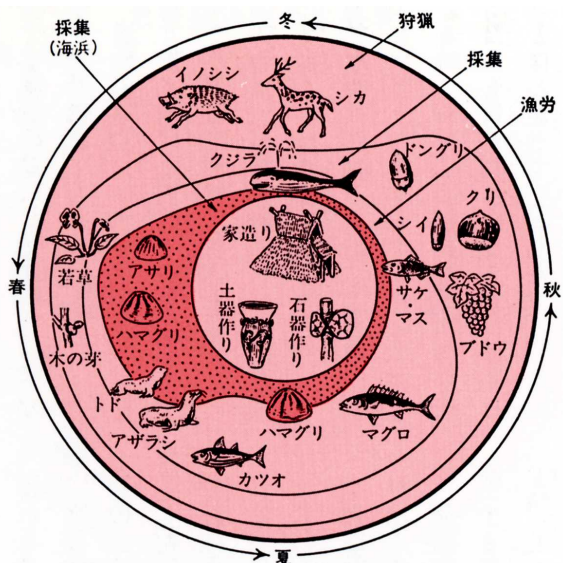
現在の湖畔地区にあたる、狭山丘陵南面の縄文中期の家と炉

この時代になると、竪穴住居に住むようになり、家の中に炉が置かれるようになりました。
資料はいずれも東大和市史資料編 3 発掘された先人のくらし によります。



左 国分寺市多喜窪遺跡 勝坂式縄文式土器（国指定重要文化財）

右 東大和市八幡谷戸遺跡（奈良橋八幡神社南）から発見された大量の打製石器



縄文人の生活カレンダー（図は小林達雄氏の原案による）

縄文人の生活カレンダー

狩猟採集、移動を中心とする縄文時代観から、最近では、縄文稲作の研究が進むほど、縄文人の生活に対する認識は変化しています。

東村山市の下宅部遺跡は縄文晩期の遺跡ですが

直径40センチもあろうかと思われる木材が加工されて、トチやクルミの実の灰汁抜きをした食料加工場があります。精巧な模様の土器。

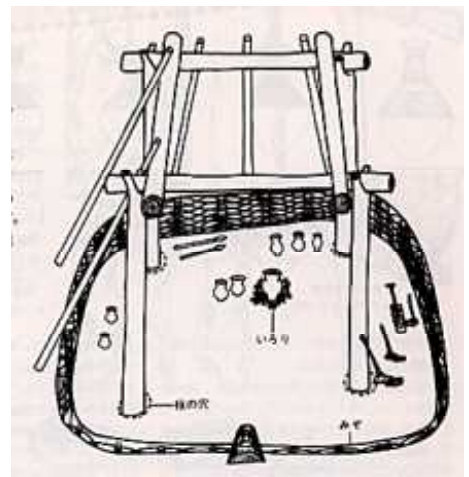
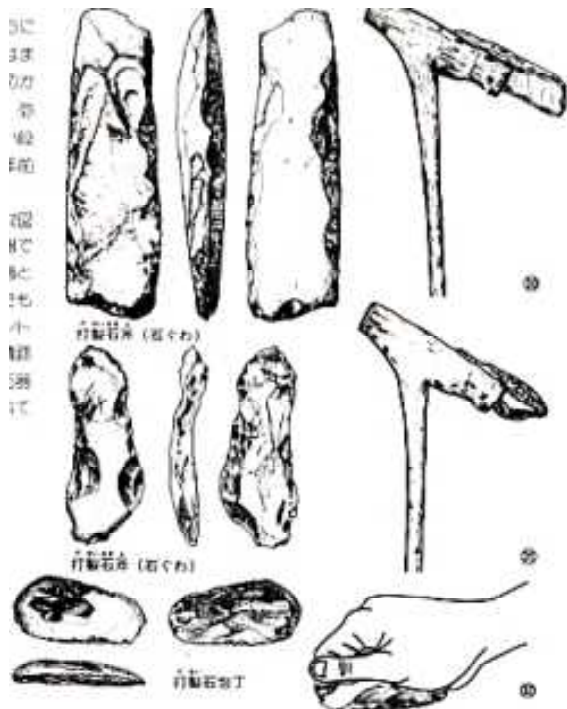


稲作の時代（弥生時代）

残念ながら、東大和市内では、現在のところ、弥生時代の遺跡が発見されていません。東大和市の狭山丘陵から南に広がる台地には、水の関係から、水田耕作ができなかったと考えられます。空堀川の縁に多少の森林がある程度で、一面に茅の原ではなかったかと推定されます。そのため、原への進出は江戸時代まで待たなければならなかったようです。



所沢市に属する狭山丘陵の中の遺跡のイラストで、東大和市にある谷戸と同じような状況を表しています。丘陵の中の弥生遺跡からは、縄文時代に使われていた石器が一緒に出ることがあり、ことによると、縄文時代の影響が残っていたのかも知れません。(所沢市教育委員会「ぼくらの祖先達は日向遺跡編」p20-21)



東大和市でも、発見されることを期待したいものです。



所沢市日向遺跡の家と道具

所沢市教育委員会「ぼくらの祖先達は日向遺跡編」から引用

弥生時代の時代区分 普通、次のように分けられますが、様々な意見があります。

- 前期 紀元前3～前2世紀
- 中期 紀元前1～後1世紀
- 後期 紀元後2～後3世紀

古墳時代

弥生時代に生産性を高めた人々は、次ぎに古墳時代を生み出しました。

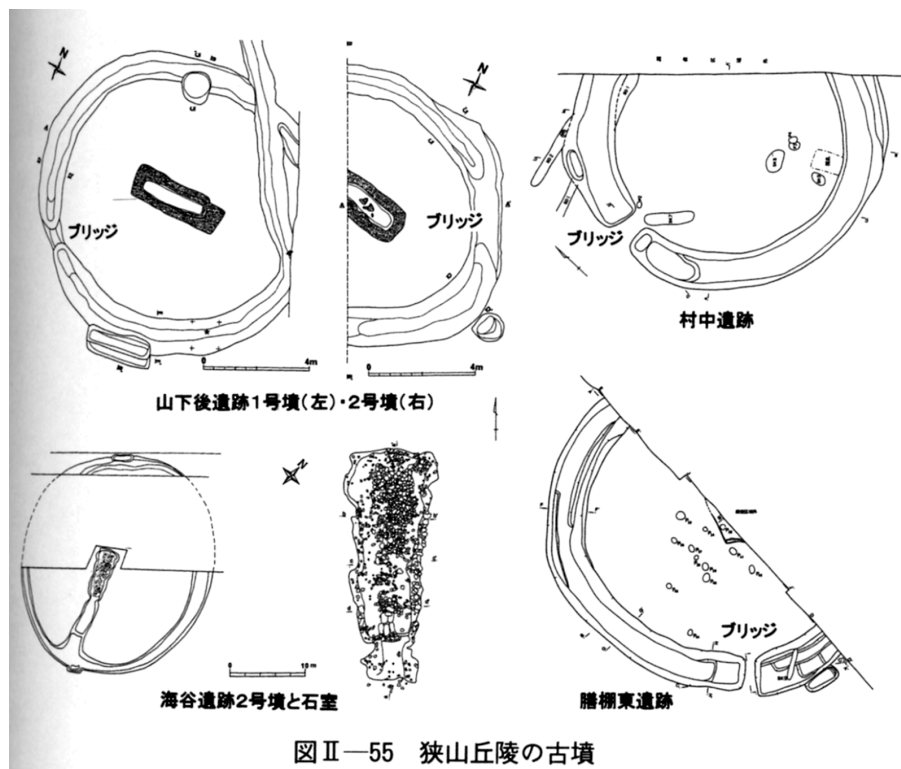
左は埼玉県行田市 丸墓山古墳、直径102メートルという日本一大



きい円墳。6世紀建造説があり、有名な辛亥銘鉄剣を出土した稲荷山古墳と接して造られています。

左は「吉見の百穴」と親しまれている横穴墓。現在222基が確認されています。家族墓で7世紀の古墳です。

狭山丘陵の古墳



図Ⅱ—55 狭山丘陵の古墳
(武蔵村山市史上 p 224)

山下後遺跡 1号墳、2号墳

位置 所沢市柳瀬川
中流左岸 下図7

1号墳 径12.6メートル

2号墳 径10.3メートル

7世紀前半～中葉

村中遺跡

位置 同上 標高80メートル
径13.5メートル

6世紀後半～7世紀
初頭

善棚東遺跡

位置 同上

径20メートル

7世紀初頭

海谷遺跡

位置 同上

径26メートル

7世紀中頃

狭山丘陵の古墳時代遺跡

東大和市域には古墳時代の遺物が表面採集としてありますが、発掘された遺跡はありません。



古墳

7	所沢市山口	山下後遺跡	円墳	2基	7世紀中葉
	所沢市柳瀬	滝之城横穴墓群		7基	7世紀中葉
9	所沢市北秋津	北秋津横穴墓群		1基	7世紀中葉

集落、住居跡

1	日向北遺跡	かまど跡	鬼高期	東村山市多摩湖町
2	吉祥山遺跡	火災住居址と生活跡	鬼高期	武蔵村山市中藤

3	後が谷戸遺跡	流路、溝（木製品土器片）	武蔵村山市岸
4	お伊勢山遺跡	住居址 1 4 軒 和泉、鬼高期	所沢市三ヶ島
5	日向遺跡	住居址 2 4 軒 鬼高期	所沢市三ヶ島
6	高峰遺跡	住居址 3 3 軒 和泉、鬼高期	所沢市北野
6	野竹遺跡	住居址 9 軒 鬼高期	所沢市北野

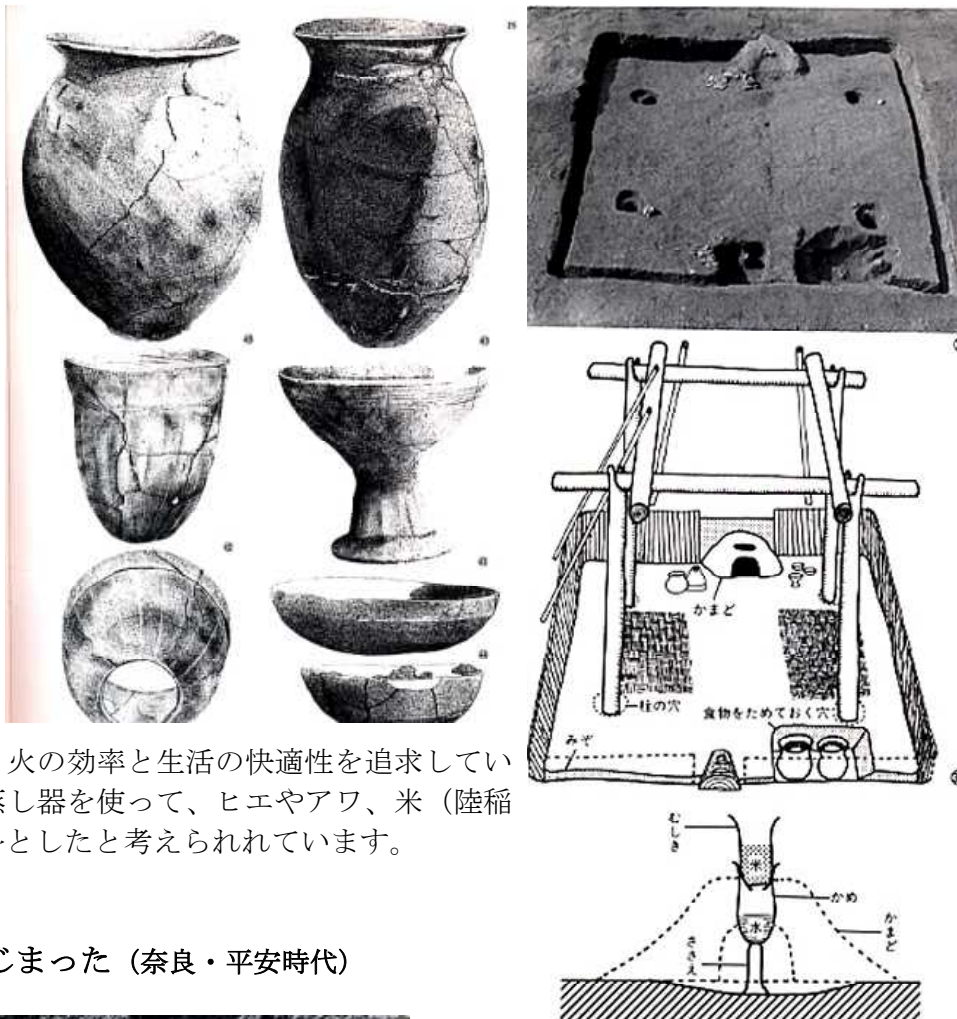
古墳時代の時代区分

時 期 区 分	土 師 器 の 編 年	
前期 4 世紀	五領式（埼玉県 東松山市	五領遺跡）
中期 5 世紀	和泉式（東京都 狛江市	和泉遺跡）
後期 6～7 世紀	鬼高式（千葉県 市川市	鬼高遺跡）

右は所沢市三ヶ島の日向遺跡で発掘された住居址と土器。

4 軒の住居跡が発見されています。丘陵の南斜面で、近くに川があり、畑をつくっていました。

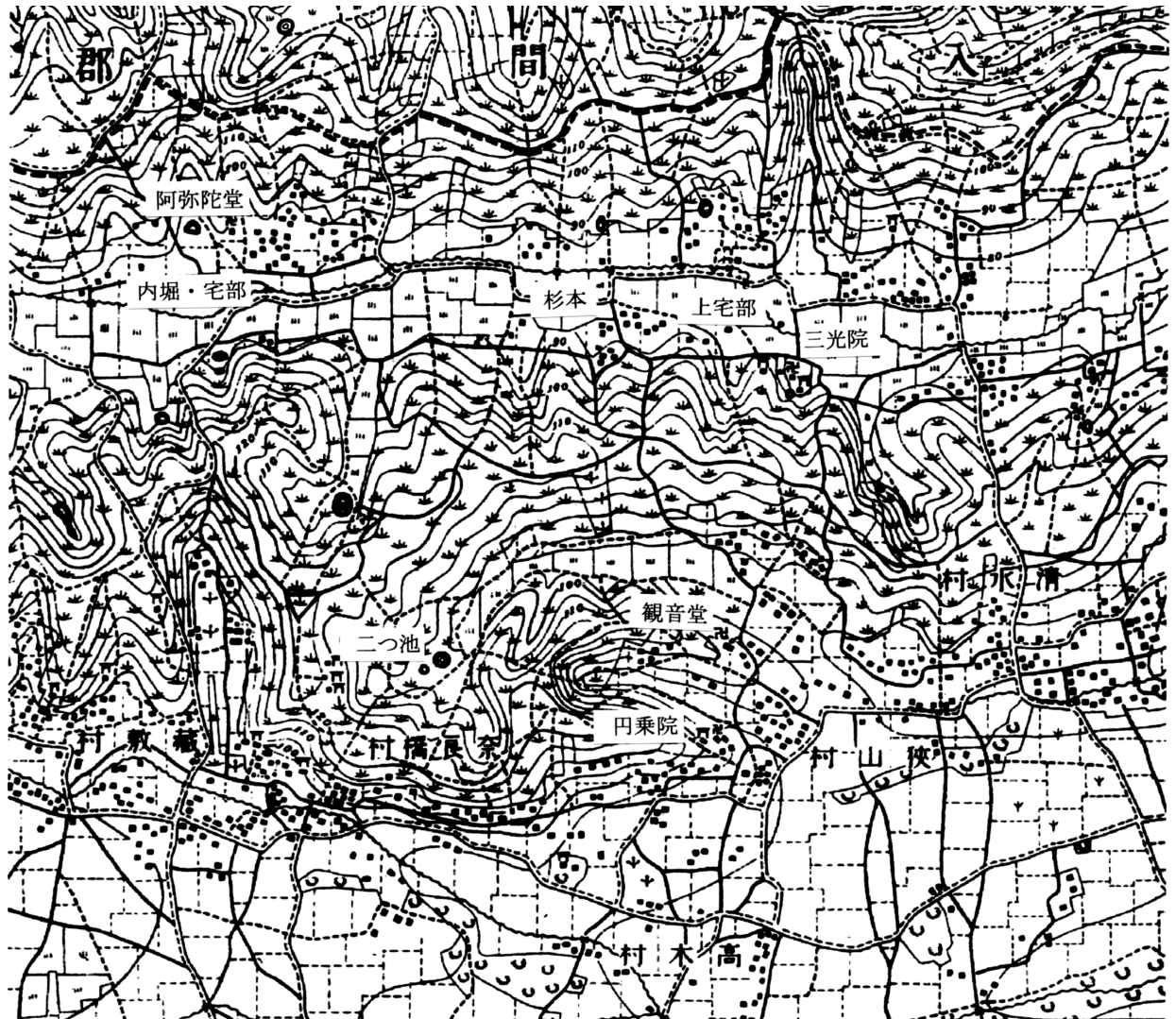
土器の形式から 6 世紀から 7 世紀頃のものと考えられています。住居は竪穴を掘って 4 本の柱で屋根を支え、多くは北側に竈を持ちます。この竈は外側に煙り出しをつけたもので、火の効率と生活の快適性を追求しています。竈では土器の蒸し器を使って、ヒエやアワ、米（陸稲を含む）を蒸して食料としたと考えられています。



IV 谷戸の開発がはじまった（奈良・平安時代）



東大和市にも、奈良・平安時代になると人が住み始めました。それは谷戸の湧き水を利用する極めて小規模な生活でした。上の図は「廻田谷ツ遺跡」の住居址とツボです。精力的に分析が進められて、奈良・平安から鎌倉時代までの範囲が考えられています。



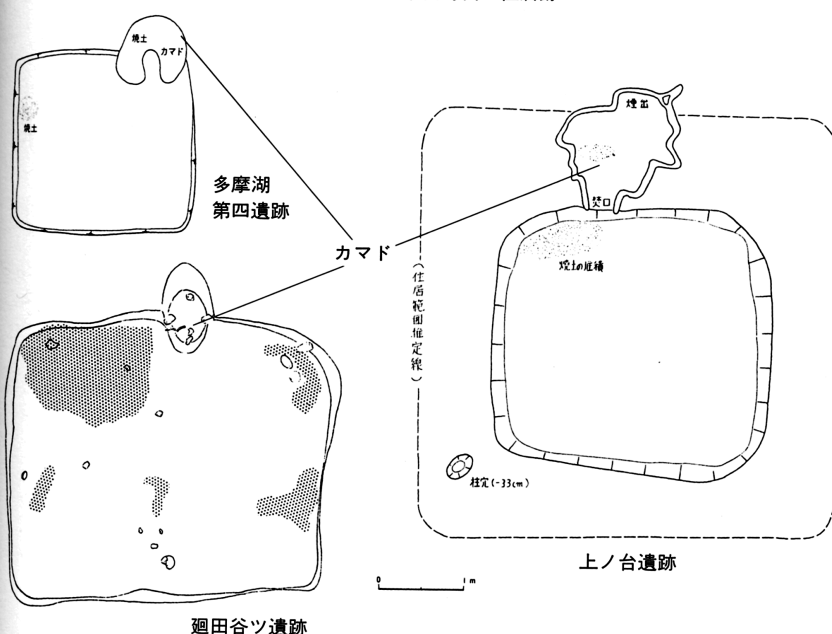
(明治15年迅速図)

地元の住民が「メグツタ田んぼ」と呼んだ「水田」を耕して生活の基盤にした最初の住民といえるかも知れません。

家は竪穴で、大きさは一辺が4尺弱、北側にカマドを付けています。これで東大和市内で発見された中では最大です。多摩湖第四遺跡（貯水池の中）の家は一辺が2尺です。

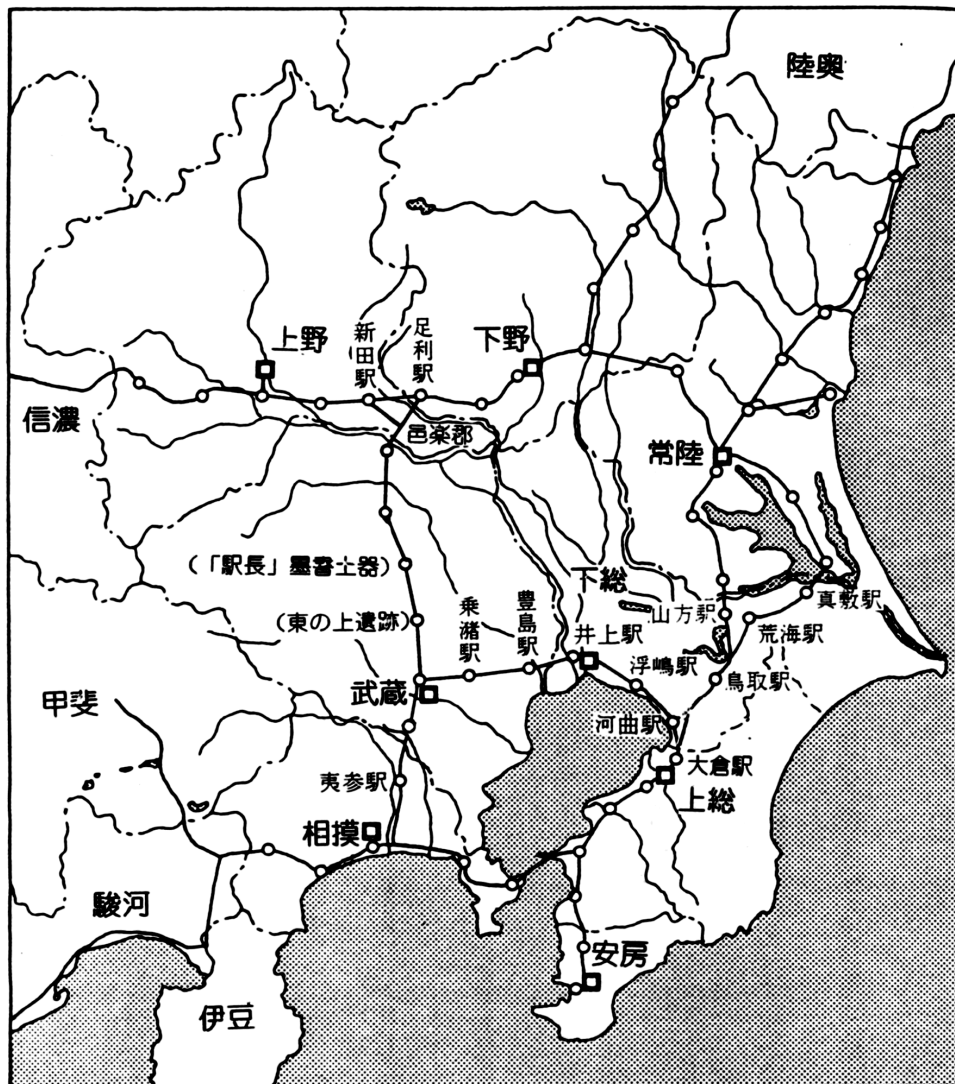
上ノ台遺跡は清水神社の南に位置します。一辺3.4尺で、平安時代前半のも

発掘された平安時代の住居跡



のと考えられています。

東山道武蔵路、武蔵国府、武蔵国分寺の建設



第2図 宝亀2年(771)以前の東国の駅路 (中村太一『日本古代国家と計画道路』(吉川弘文館)所載図を修正・付記)

大和周辺にも何らかの生活が営まれたものと思われます。図は多摩のあゆみ188号から引用。

茫漠たる武蔵野の中に側溝付、幅12^{フナ}の道路が造られました。古代権力の象徴のように池の中も狭山丘陵もほぼ真っ直ぐに相模から上野まで進みます。埼玉県所沢市で出土した土器から600年代後半に造られたと考えられています。

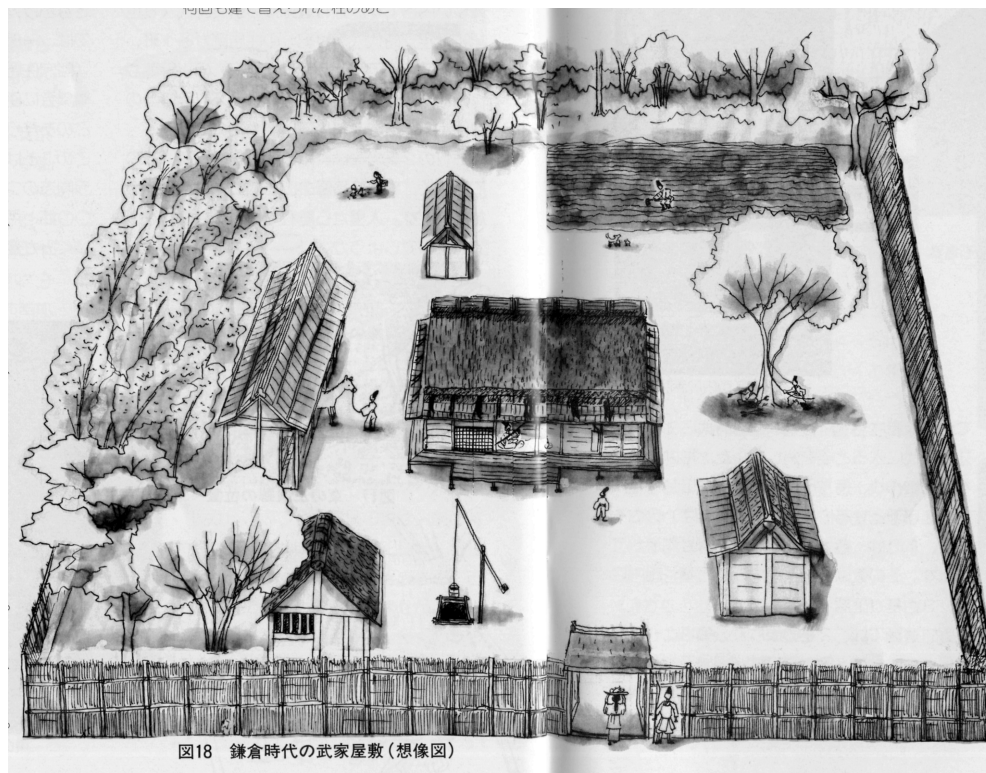
そして、時を同じくして、府中市には「武蔵国府」、国分寺市には「武蔵国分寺」が建設され、技術者や管理をする人含め多くの移住者が多摩川周辺に来ました。

東山道武蔵路は東村山市を通り、東大和市に直接関係は持たれませんでした。その影響を受けながら東

V 武士の発生

豪族の出現→郡司

生産力の高まりとともに、10世紀から11世紀にかけて、土着の豪族が生まれてきました。最近各地で豪族の館が発見されています。所沢市・野竹遺跡では、鎌倉・室町時代の武士の館が発見されています。



鎌倉・室町時代の武士の小さな館

広さ約50×40mの敷地に9棟以上の建物跡と2基の井戸を持っていました。僅かですが、中国（明）渡来の青磁・白磁、瀬戸地方の陶器の破片が発見されました。主屋は東西に長い6間×2間、南北に長い馬屋がありました。瓦が出ていないのでカヤなどの草葺きであったと想定されます。

所沢市では山口氏の家臣か一族で椿峰と北野を領地とした武士ではないかとしています。画像は所沢市教育委員会「ぼくらの先祖達は2椿峰遺跡群編」p32から引用しました。

武蔵村山市

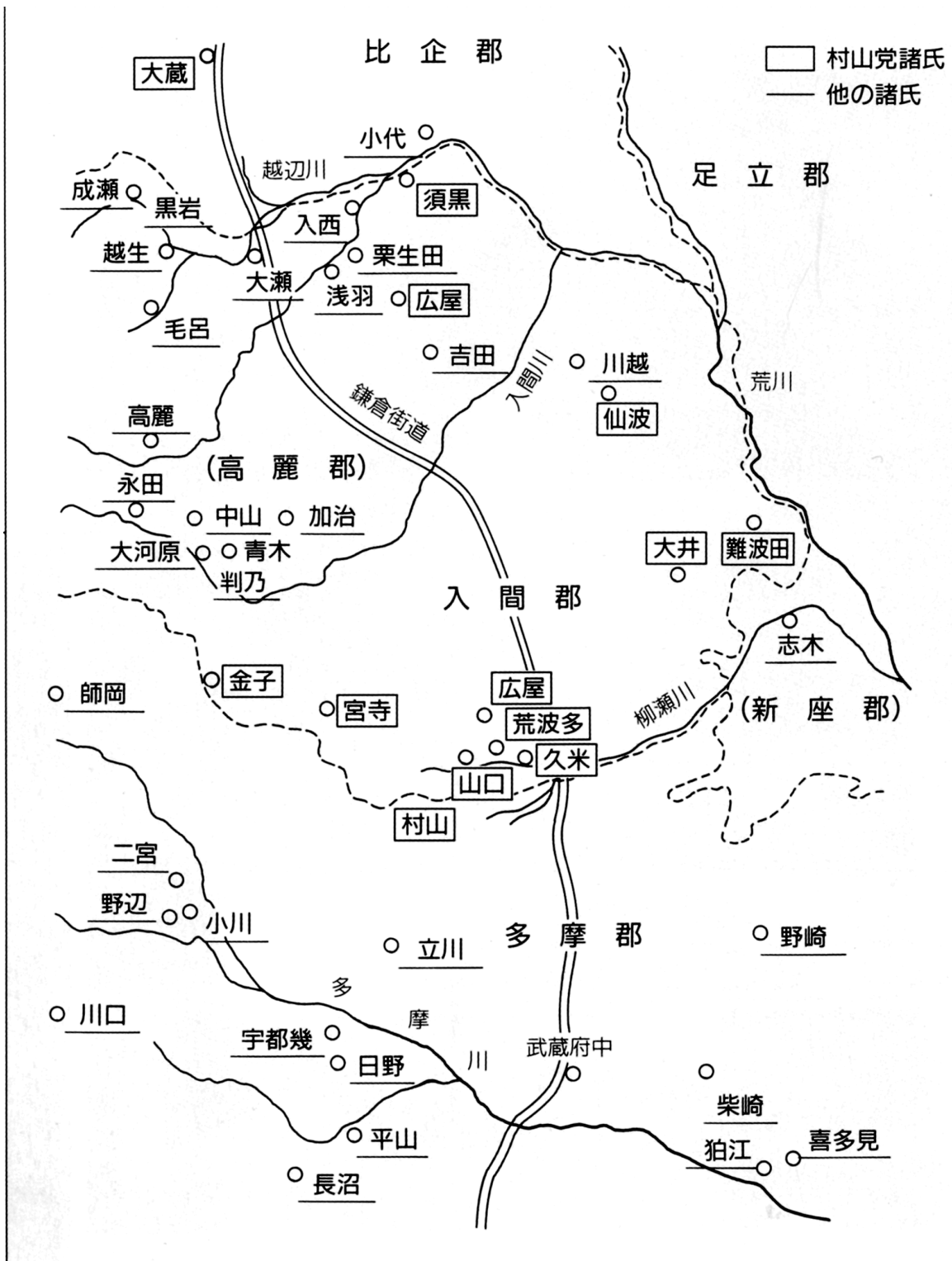
武蔵村山市の狭山丘陵の中、赤堀地区に「赤堀」遺跡があります。鍛冶跡を思わせる遺物が発見され、併せて10世紀後半から11世紀初頭と考えられる鉄器の破片が出土しています。

武蔵七党

このように各地で発生した武士は血縁によって結ばれ同族的武士団を構成しました。武蔵七党と呼ばれます。代表的なものとして

- ・野与党 埼玉郡を本拠
- ・猪俣党 埼玉県美里町付近を本拠
- ・丹党 秩父石田牧の別当から成長
- ・児玉党 本庄、越生などを本拠
- ・私市（きさいち）党 大里郡、埼玉地方を根拠
- ・綴党（都築） 神奈川県

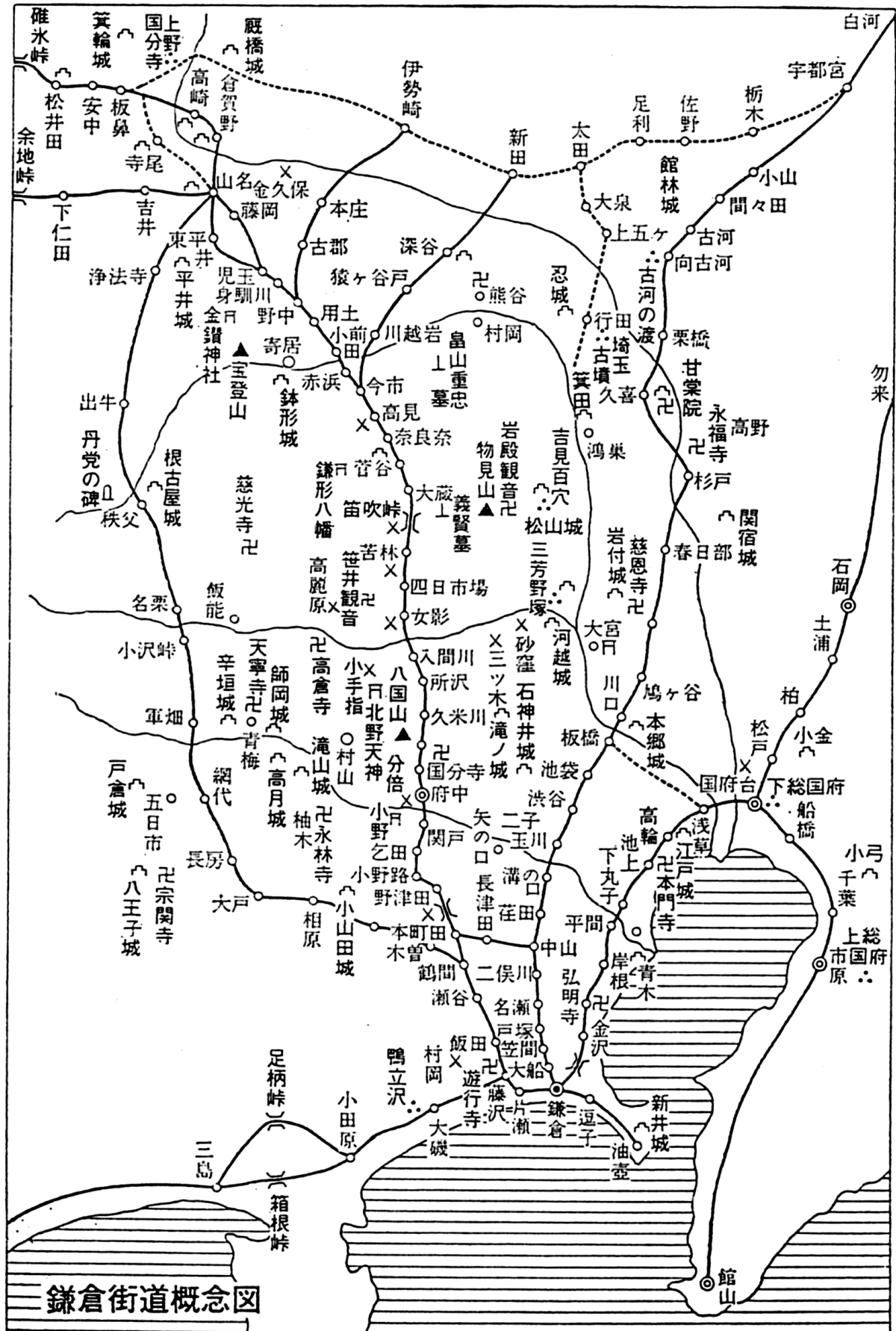
などがあり、どれをとって七つとするかはきまりがありません。狭山丘陵周辺に関わりが深いのは村山党、西党、横山党です。



村山党諸氏分布図（図説東村山市史 p 77）

東大和市域に居住した人々は「山口氏」に属したと考えられます。本拠は所沢市山口の山口城にあり、狭山湖に沈んだ根古屋城、大堀山、滝の城などを支城としたようです。

鎌倉街道（上ツ道）



(栗原仲道 鎌倉街道を行く p 12)



第4-3図 新田・幕府軍合戦要図

(入間市史 p 244)

・幕府の弱体化を突いて、元弘3年（1333）5月8日、新田義貞が挙兵（上野国新田荘生品明神）鎌倉街道を南下

・小手指ヶ原（所沢市）の合戦

5月11日 幕府軍が派遣した北条氏と終日激戦、勝敗決せず、幕府軍は久米川に退き、義貞軍は入間川に退いた。

・久米川の合戦

5月12日 両軍は久米川で合戦 幕府軍に対し新田義貞軍が優勢となり、幕府軍は府中の分倍河原に退く。義貞は久米川に陣取る。

・分倍河原の合戦

5月15～16日 府中市の多摩川分倍河原で激戦

15日、新田義貞軍敗退 堀兼まで退く。

16日、新田義貞軍分倍河原を急襲、幕府軍敗退。

22日、新田義貞 稲村ヶ崎から突入

22日、北条氏滅亡 鎌倉幕府滅亡

○この合戦に村山党は新田義貞側につきました。太平記に「坂東八平氏、武蔵七党」が義貞に属し、分倍河原に戦ったことを記しています。

○北条氏の専横に、御家人の窮迫が加わり不満が充満していたことが背景に考えられます。

○同じ党を組む武蔵武士の中でも、日常の交流、身分関係によっては、幕府方、新田方、足利方それぞれに関係があり、どこに所属するかは所領を「一所懸命」で安堵する上から、又恩義の上から迷うことが多かったと考えられます。

○東大和市には奈良橋八幡神社の東側の道路を鎌倉街道とし、新田義貞が「コサイケ」でオカユを炊き、東村山市の金山神社南側で食べたとする伝承（オカユ塚）があります。

VI 豊鹿島神社の創建

①創建伝承

- ・芋窪にある「豊鹿島神社」は東大和市で最古の創建伝承を持ちます。
- ・「武蔵名勝図絵」は社伝を記載し「慶雲4年（707）武蔵国へ来た鬼神を常陸峯にて鎮めて、天智天皇第四の姫宮、および蘇我山田石川麻呂が建立した」としています。

②建武3年（1336）の銘を持つ鐘

- ・新編武蔵風土記稿、武蔵名勝図絵は、建武3年（1336）の銘を持つ鐘が社前にあったとします。

③創建棟札

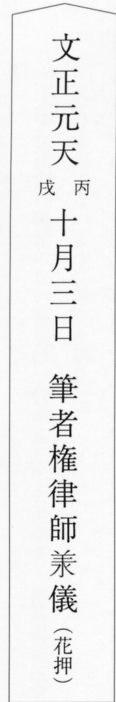
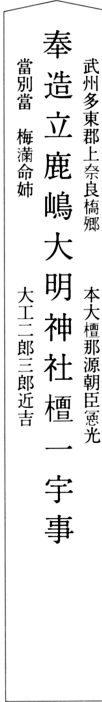
豊鹿島神社には多くの棟札が残されていますが、最も古いのは、文正元年（1466）「鹿嶋大明神」本大檀那 源朝臣憲光 別当 若満命姉で、神社名は「鹿嶋大明神」でした。

④祭神

（たけみかづちのみこと）

- ・武御加豆智命を祀りますが、常陸一宮「鹿島神宮」に祀られる、武神である建御雷命を勧請したことが考えられます。この神は中臣・藤原氏の氏神でした。

○現在は「豊鹿島神社」としていますが、「豊」がつくのは、明治以降です。



（裏面）

創建棟札

東大和市神社の伝承

清水神社 清水 創建建保2年（1214）祭神素戔鳴尊・大己貴尊・稲田姫命 古くから氷川神社といわれ、多摩湖の宅部川の近くにありました。

狭山神社 狭山 創建不明 天狗神社といわれました。 狭山の栞 祭神 ^{いざなぎ いざなみ}伊弉諾伊弉丹。

高木神社・塩釜神社 高木 創建不明 ^{じょうどの}尉 殿神社として、宝暦8年（1758）に再建。

祭神 手力雄命（たちからおのみこと）狭山の栞 高皇産霊神。

八幡神社 奈良橋 勧請不明 天正3年（1575）の棟札があります。

祭神 菅田和気命 応神天皇、大山祇命（おおやまつみのみこと）日月大神、市杵島姫命 火産日命（ほむすびのみこと）建御名方命（たけみなかた）。

熊野神社 蔵敷 創建不明 永禄年間（1558～1572）天文2年（1533）説あり。

祭神 伊弉諾（いざなぎ）伊弉丹（いざなみ）。

かつて、熊野大権現といわれました。内野家の鬼門除けに建立との説があります。

蔵島神社 蔵敷 創建不明 天正6年（1588）説などがあります。

内野家の私有地に祠を建てたといわれます。祭神 市杵島姫命。

八雲住吉神社 芋窪 勧請不明 祭神不明 天王様とも呼ばれます。貯水池移転により移転。

東大和の寺院の伝承

三光院 清水。真義真言宗、豊山派 本尊 阿弥陀如来 創建不明 延文の頃（1350年代）山口領宅部郷清水村之内上宅部（多摩湖の取水塔の近く）にありました。大正12年貯水池工事により移転。天正19年（1587）家康から朱印3石を受ける。

円乗院 狭山。真義真言宗、智山派 本尊 不動明王 上石神井三宝寺末 創建 平治元年（1159）開山法印賢与入寂の記録あり。狭山の栞に、古時、上の屋敷に「延寿院」が

あったが、慶長12年の台風により坊舎が吹きつぶれられたので、現在の地に移った、との記事があります。

雲性寺 奈良橋。真義真言宗、豊山派 本尊 阿弥陀三尊 中藤村真福寺の末 開山開基不詳 永享11年(1439)堂宇建設の寺伝があります。

蓮花寺 芋窪。真義真言宗、豊山派 本尊 不動三尊 中藤村真福寺の末 草創開山開基不詳 寛永8年(1631)中興開基の承雲入寂との寺伝があります

慶性院 芋窪。真義真言宗、豊山派 本尊 不動明王 中藤村真福寺の末 開山 慶長6年(1601)石川(多摩湖の湖底)にあり、移転。狭山の葉には創建を天文16年(1547)以前とする寺伝があります。

東大和市の板碑

中世以降の歴史を物語るものに「板碑」があります。一種の供養塔で、秩父産の青石(秩父緑泥変岩)でつくられています。「石造塔」とも言われるように、墓標ではなく、追善や追福の供養のため建てられたと考えられています。東大和市には、平成11年現在106枚が確認されています。

最古の板碑 永仁2年(1294)狭山丘陵(水道事務所北側)

最下限の板碑 天文11年(1542)円乗院

右は東大和市郷土博物館所蔵 永仁の板碑



元弘3年の板碑

東村山市の徳蔵寺に、新田義貞が鎌倉を攻めた際亡くなった飽間氏3名の戦死を記した板碑があり、国宝に指定されています。

元弘3年5月15日の分倍河原の合戦と5月18日の村岡での合戦を伝えるもので、史実を金石文の上から裏付けるものとして重要視されています。

また、銘文に「勸進玖阿弥陀仏、執筆遍阿弥陀仏」と記してあり、時宗の僧が勸進して造立したことがわかります。当時の時宗の僧と合戦の関わりは、供養もさりながら情報伝達の上からも重要な役割を持っていました。



近くに長久寺(所沢市久米)があり、時宗の寺として知られ、造立の関連を指摘されています。飽間氏は上野国飽間郷の領主とされ、新田氏の旗揚げに最初から加わったとされます。

(東村山教育委員会・徳蔵寺板碑保存会「新田義貞鎌倉攻めと徳蔵寺元弘の板碑」から引用)



東大和市の三光院にも時宗と関係する板碑があります。三光院は清水だけでなく、東村山市廻田地区と関わりがあり、この周辺の末寺を含め、中世のある時期には時宗の教団が活躍していたことが伺えます。

VII 後北条氏と村

大石氏の支配

東大和市周辺は中世、武蔵武士である山口氏の支配下にありました。その後は、南北朝の戦乱の時代を経て、鎌倉府の分裂、太田道灌や三田氏の活躍を近くに見て、大石氏の支配下に属しました。

大石氏は武蔵守護代として鎌倉公方・関東管領上杉家の保護を受け、統治の範囲が広く、相模国座間から武蔵国所沢周辺にまで及んでいました。所沢市久米の「永源寺」に「武蔵守護代大石信重」の墓所があり、永源寺は大石氏の創建と伝えられます（右画像）。



戦国時代には、天文11年（1542）2月、北野天神社の神主を大石氏が安堵した資料があります。このように狭山丘陵の東大和にすぐ近いところに関連する史跡がありますが、残念ながら、直接、大石氏と東大和市域の村々の関係を示す文書や関係資料はなく、東大和市のその時代の様子ははっきりしません。

やがて、北条早雲が率いる後北条氏の勢力が伸びてきて、氏照が大石氏の養子になるという戦国縁組みによって巧みに勢力下に組み込まれました。武蔵野は戦国時代に入りました。

後北条氏の武蔵制覇

氏照は滝山城、八王子城に本拠を置いて武蔵の支配を進めますが、東大和市域に関する部分は詳細が明らかになっていません。東大和周辺に戦国大名である武田信玄、上杉謙信、北条早雲などの動きが及びます。主な合戦のみ紹介します。

明応3年（1494）9月、北条早雲 久米川（東村山市）に着陣

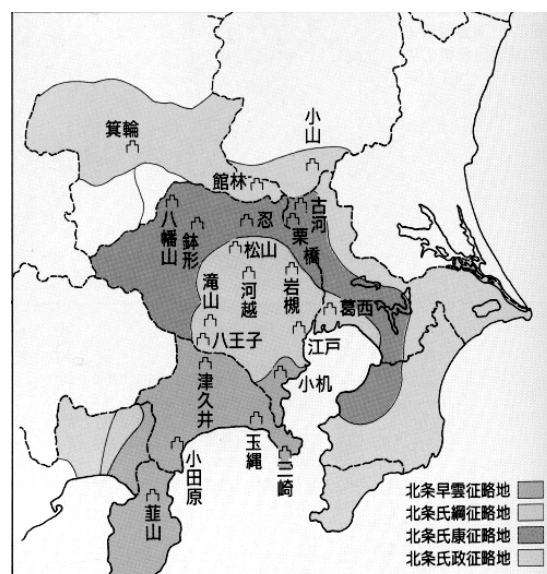
永正元年（1504） 立河原合戦

大永4年（1524） 江戸城攻略

天文6年（1537） 河越城攻略

天文15年（1546） 河越夜合戦

河越夜合戦の勝利によって後北条氏は武蔵を制覇します。



後北条氏の支配地

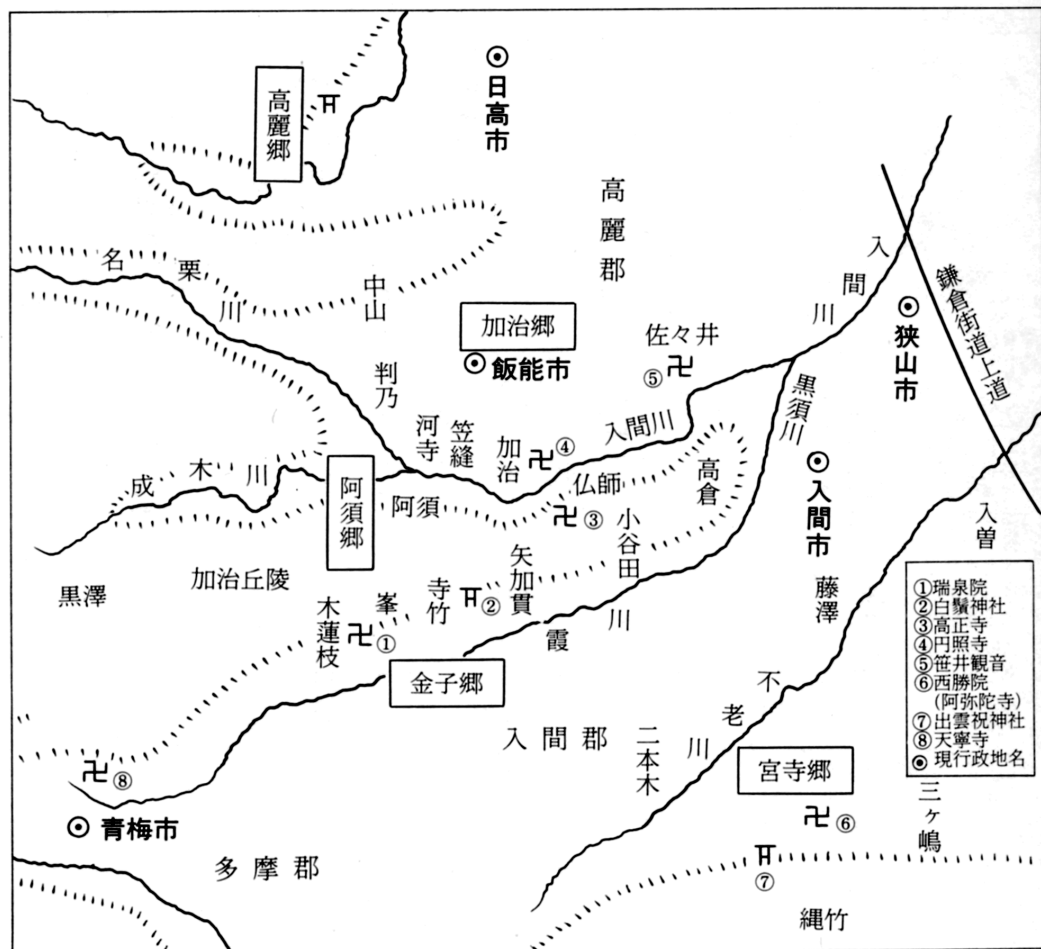
八王子城の建設と村

氏照は最初、滝山城に居ましたが、天正6年（1578）頃から八王子城の建設に入り、天正10年（1582）には、現在残されているような形の築城がなされたとされます（下山久治 八王子城主・北条氏照）。

年代をはっきりさせる書類や文章がなく、現在も研究が続けられています。築城に当た



つては、周辺農民が夫役^{ぶやく}として徴用されました。東大和に成立していた「奈良橋郷」「宅部郷」の農民もそれに従ったことが考えられます。「奈良橋郷」「宅部郷」は鹿島神社の棟札や東村山市の正福寺の棟札から、その存在が推測されますが、残念ながら実態は不明です。そこで、近くの入間市の状況を紹介します。



第4-6図 中世郷村略地図

頼朝の時代に勢力を強めた金子氏や加治氏の故郷です。(入間市史 p 309) 東大和でも、例えば奈良・平安時代の廻田谷ツに定着した人々が家族を増やし、あるいは新たに定着して、丘陵の谷ツを根拠地とした素朴な集落が成立していたと考えます。しかし、その実態は明らかではありません。

小田原合戦・後北条氏の滅亡

戦国大名として関東に覇権を確立した後北条氏は、織田信長の全国統一の機運を前に、領土拡張と生き抜くため、後背・隣国と様々な同盟関係を結びましたが、ついに全国制覇を目指す豊臣秀吉と小田原合戦を迎え、破れて小田原城、八王子城を明け渡し、徳川家康が関東に入ります。

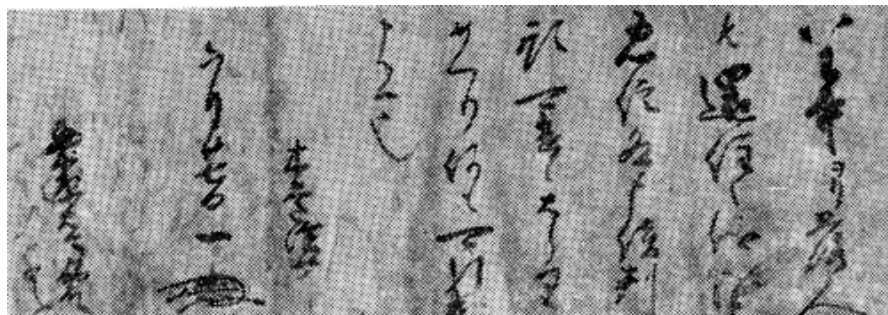
天正18年(1590)

- 1月 氏照ら小田原城に籠城
- 2月 秀吉軍進発
- 4月27日 江戸城開城
- 5月22日 岩付城開城
- 5月 河越城開城

6月14日 鉢形城開城
6月23日 八王子城開城
24日 前田利家八王子城下に禁制
27日 木村常陸介 八王子城の降人を在地に還住させる
6月24日 菰山城開城
6月25日 津久井城開城
7月5日 小田原城開城 家康の斡旋 北条氏直降伏
7月11日 忍城開城
8月1日 家康 江戸入府

武士の帰農

後北条氏に仕えていた武士は、敗戦とともに徳川家に仕えるか出身地に帰って帰農するかの道を選びました。埼玉県入間市二本木の栗原家に、次の文書が残されています。



『八王寺より落人共、還^{げんじゅう}住の儀、忠信に依って、各々申し談じ、判形遣わすべく候。
はしりめぐり、いずれも引き出し申すべきものなり。
(天正十八年)六月二十七日

木村常陸介
一(花押)

栗原右馬助殿』

天正18年6月23日、八王子城が落城したことにより、八王子領（入間・多摩郡を中心）は豊臣の占領下に入りました。その4日後に、落人が信用できる人物か「忠信」によって判断した後に、還住を許可するという意志を伝える文書です。

青梅市や武蔵村山市を中心に、後に初期新田開発に名をあげる指導者は、ほとんどが武田、後北条氏出身と伝える伝承を持ちます。

VIII 徳川家康の江戸入府と地頭の配置

小田原合戦が終結した天正18年（1590）、秀吉が更に奥州討伐に向かう中、徳川家康は江戸に移りました（8月1日と云われ、7月23日との説もあります）。これまでの駿河・遠江・三河・甲斐・信濃の5か国から、後北条氏の支配地であった、伊豆・相模・武蔵・上総・下総・上野と下野の一部の7か国、計240万石の関東への国代わりです。



翌、天正19年（1591）5月には、芋久保村に家康の直属の家臣である酒井氏が領主（地頭）として配属されてきました。まだ、江戸の整備が進まない段階ですから、家臣達は家族を連れて村に住みました。住居が間に合わない場合は、地元の勢力家、寺などに一時、仮の住まいを定めたとされます。江戸へは馬で通い、仮設の施設で業務に従事しました。業務の内容は200～300石との小禄ですが、徳川氏の家政や奥向きの必需品を供給する役、小姓・親衛隊など主君の側に仕える役が多かったのではないかとされます。芋窪には「陣屋」の屋号を持つ家が現存します。

慶安2年頃の地頭

慶安2年（1649）頃、江戸幕府が作成した「武蔵田園簿」には、東大和の村々に、すべて家康直属の家臣が配置されていることがわかります。第8表は大和町史研究3 p 10から引用するものですが、当時、東大和市域には、芋久保村、奈良橋村、高木村、後ヶ谷村、清水村があり、それぞれに地頭が配属されていたことがわかります。

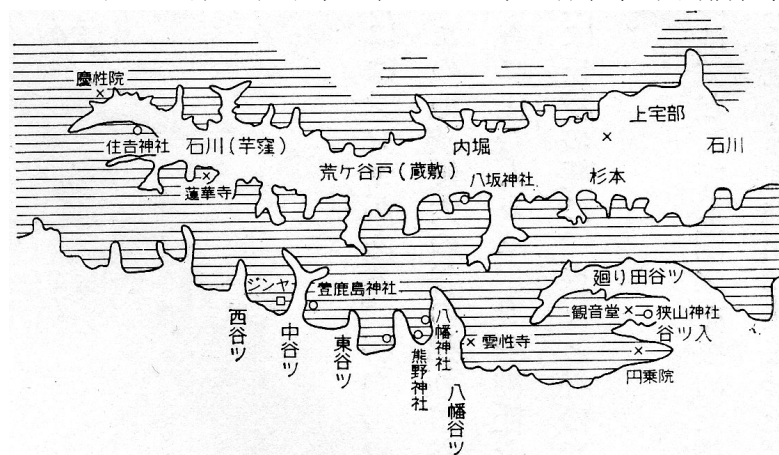
また、現在の東村山市域には、廻り田村に地頭が配置されていますが、野口村、久米川村など街道の要衝を占める地域は徳川直轄領で代官支配であったことがわかります。

第8表

村名	村高	知行人・代官	知行高	※代官
芋久保村	380.石	酒井極之助 酒井郷藏	170石 210	※代官
奈良橋村	330.	石川太郎左衛門	330	
高木村	70.	酒井極之助 酒井郷藏	30 40	
清水村	300.	浅井七平	300	
後ヶ谷村	300.	溝口佐左衛門 辺見四郎左衛門	150 150	
廻り田村	500.	中川佐平 富田平之丞	300 200	
野口村	584.9斗	※今井八郎左衛門	584.9斗	
久米川村	132.1.5升	※今井八郎左衛門	132.1.5升	
南秋津村	96.6.8.5合	※今井八郎左衛門	96.6.8.5合	
野塩村	113.	向坂与八郎	113	
宅部村				

村切り

上の表には東大和市域の村として芋久保村、奈良橋村、高木村、清水村、後ヶ谷村の五村があげられていますが、これらの村は家康の家臣が配属される頃つくられたようです。



その経過を辿ると、東大和市には左図のような谷ツがあり、この谷ツを中心に、村と云うよりは素朴な集落が営まれていたことがわかります。

そこには次頁の画像のように谷ツを利用して生活していた同族集

団のグループがあったようです。

徳川家康の江戸入府とともにそのグループは、「村」として、税＝年貢を負担する母体にまとめられました。例えば曾水村、後ヶ谷村300石のように一定の収穫高で表される大きなグループに集められたことが考えられます。これを「村切」と呼びます。



西谷ツ、中谷ツ、東谷ツ、石川⇒⇒⇒⇒⇒芋久保村
八幡谷ツ⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒奈良橋村
廻り田谷ツ、谷ツ入、杉本・宅部、内堀⇒⇒後ヶ谷村 後に内堀が独立して宅部村になる
清水、上宅部⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒清水村
高木⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒高木村



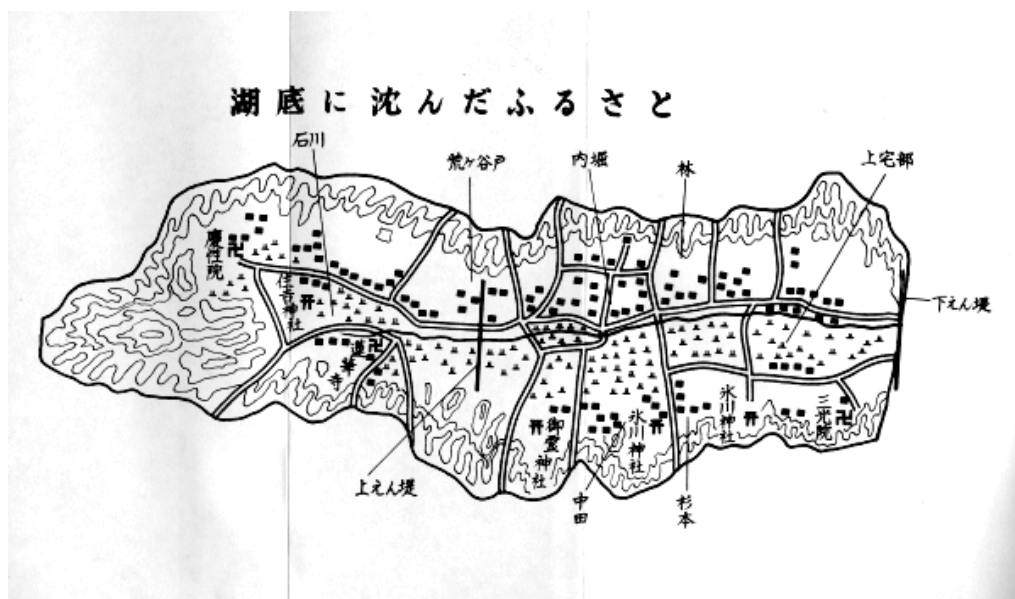
東大和の村々は狭山丘陵の中と南面の谷ツ、麓の平地を生活の拠点として、点々と住み分けていたようです。

石川、内堀、杉本、宅部、上宅部は貯水池に沈んだ村です。中央に「石川・宅部川」が流れ、この川を中心にして丘陵の中の平地を拠点としていました。

それは、昭和50年（1975）、利根川から水を引くための導水管工事のため、村山下貯水池の水が抜かれたとき、上画像のような状況で見ることができました。

右図は、実際に
ここで生活された
方が思い起こしな
がら書かれた図で
す。(内堀小十郎
著 湖底に沈んだ
ふるさと p 1 6
から引用)

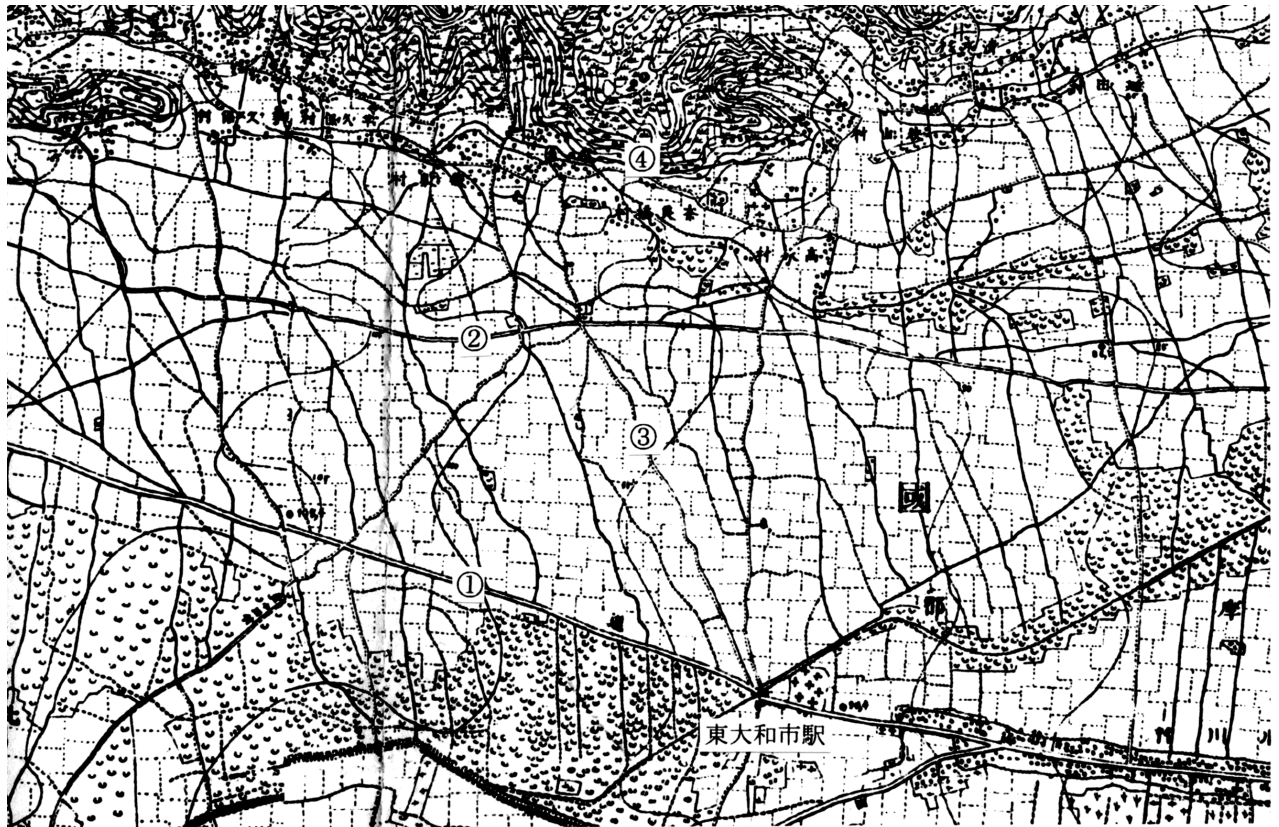
大正4年（1915）貯水池移転の時の戸数は162戸でした。



青梅街道、玉川上水、野火止用水

天正18年（1590）8月 家康の江戸入府後、秀吉の死、関ヶ原の戦（慶長5年＝1600）を経て、慶長8年（1603）2月12日、家康は征夷大將軍となり江戸に幕府を開設します。この頃から家康はこれまで手を付けなかった江戸城の本格的修築、江戸市街の整備に入ります。建設ブームに江戸は沸き、人口は急増、経済は活性化、江戸市中の形成が一気に進みました。

そこで行われたのが、青梅・成木から石灰を運ぶ青梅街道の開通、江戸市中への上水の供給のための玉川上水の開削、武蔵野の原野の新田開発のための野火止用水の開削です。



(明治14年測量図)

- ①江戸街道・旧青梅街道・成木街道（現桜街道） ②江戸街道（現新青梅街道）
③青梅街道 ④志木街道

青梅街道の開通

江戸城の修築、江戸市街の整備のための建設資材として「石灰」が重要視されました。当時、江戸近郊での石灰の生産地は成木（青梅市）でした。慶長11年（1606）、代官大久保長安のもとに幕府老中から次のような命令が出されました。

『今度江戸御城御作事、御用白土武州上成木村、北小曾村山根より取寄候。御急の事に候間、其方代官所、三田領、御領、私領まで道中筋より助馬出、滞り無く石灰附送候様申付べく候。
以上

午（慶長11年）11月

大 相模守
本 佐渡守

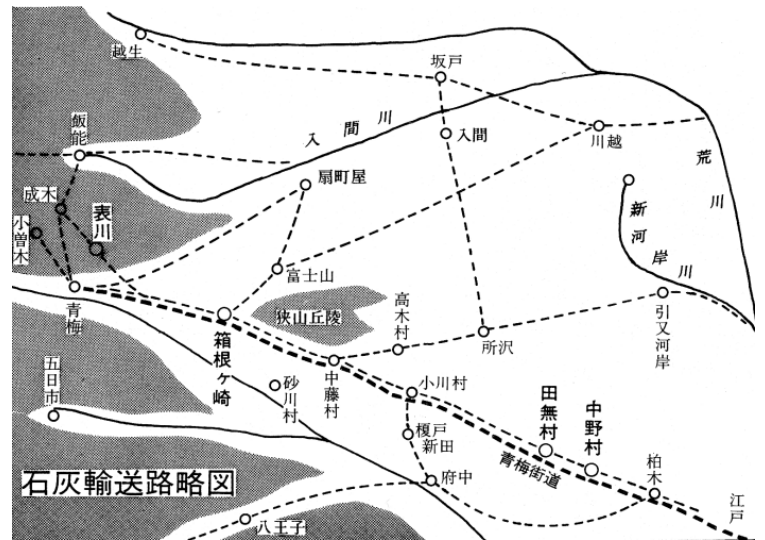
大久保石見殿』

焼いた石灰の運搬路として、武蔵野の原の中に成木街道(＝青梅街道)が整備されました。最初のコースは、青梅から、箱根ヶ崎、中藤をって、東大和市域を青梅橋に向かい、小川、田無、中野、江戸市中の順に進みました。箱根ヶ崎から青梅橋、田無の間は人家のほとんどない原の中を横断する道路で、江戸竜の口の普請場まで13里30丁の新道でした。

ご用石灰であることから、各宿駅へ、幕府による「伝馬引継」が行われ、「木綿日章の幟」をたてた「大名行列と同等な資格」の馬車が走りました。宿駅は次の4駅が定められました。宿駅には周辺の村へ助馬を出すため、60頭の馬を用意しました。

単に道が出来たのではなく、支配と一方的に近い負担のもとに「物流」と「情報の流れ」と「経済」が発生しました。それはやがて、農民を貨幣経済に巻き込む江戸地回り経済の発生をもたせします。

箱根ヶ崎から青梅橋まで、東大和の村々の南に広がる武蔵野の中を斜めに走る直線道路ができました。地元では「江戸街道」(現在の新青梅街道も江戸街道と呼ばれました)と呼ぶ、旧青梅街道＝桜街道です。



(山本和加子 青梅街道 p 20)

玉川上水の開削 松平伊豆守

赤坂の溜め池や小石川、神田上水に頼る江戸の水事情は居住者の増加と生活の向上によって、その確保が常に厳しく、対応は幕府の緊急な課題でした。さらに、三代将軍家光が諸国大名の参勤交代制度を確立させたことにより、大名や家臣が江戸へ居住し、諸国の商人・職人が集中して、江戸の人口は急増しました。飲料水確保は焦眉の急となって、ついに、多摩川の水を取り込んで江戸の上水とすることになりました。

承応2年(1653年)、幕府の責任者・老中の松平伊豆守信綱、設計・安松金右衛門、監督・伊奈半十郎(川や用水の専門家)、施工、玉川庄右衛門と清右衛門兄弟によって玉川上水を開削することに決定しました。

承応2年(1653年)4月4日、工事開始

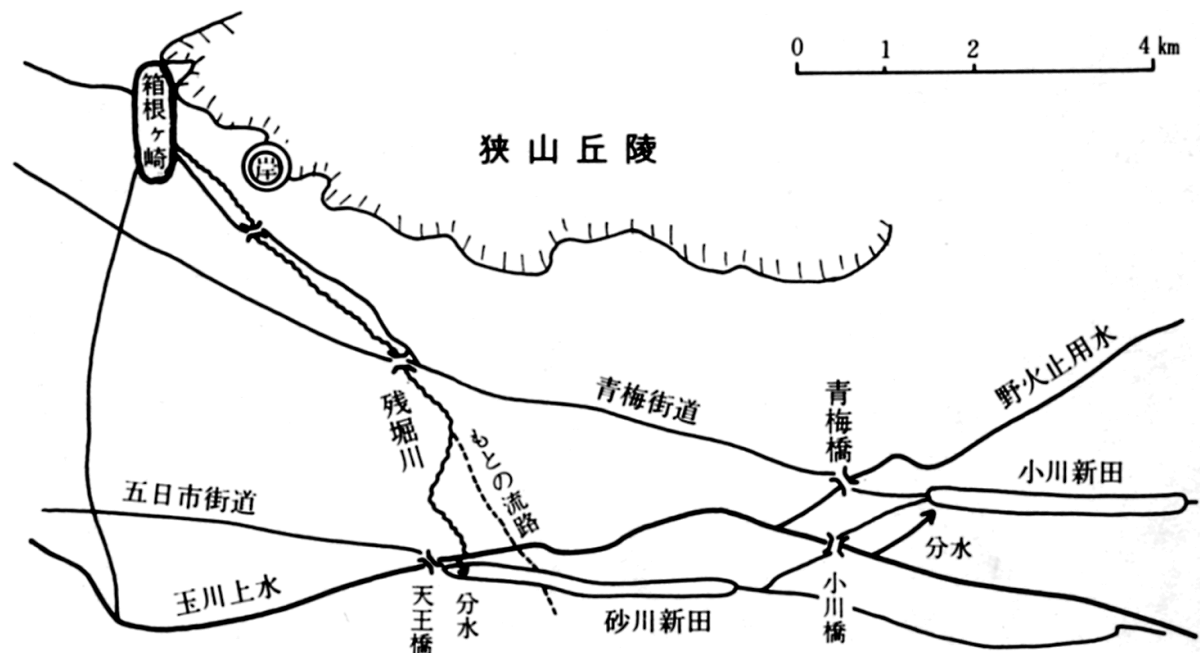
同年 11月15日、四谷大木戸まで掘り上げ

まさに突貫工事でした。ただし、この年は閏年で6月が2回あるため、約8ヶ月の工事になります。引き続き四谷から虎ノ門までの工事が終えて関連工事すべてが終了・完成したのは、承応3年(1654年)6月になります。

野火止用水の開削

玉川上水工事の統括責任者であった松平伊豆守は当時、川越の城主であり、領地の大半が広漠とした武蔵野で、特に野火止台地は開発の基になる水脈が無い状況でした。幕府財政は緊迫し、年貢増徴が大きな政治課題でした。緊迫する江戸の水事情、放置できない幕府財政などの

解決とともに、松平伊豆守は自らの統治地域の生産力増強にも迫られていました。そこで、玉川上水を分水して野火止村まで用水を開削することが検討されました。



(たましん地域文庫 肥留間 博 玉川上水 p 157)

松平伊豆守は自ら指揮をとって完成させた玉川上水工事の恩賞として、30%の分水を許可されます。本来的には江戸市中への貴重な水源であるものを途中で分水するわけですから、相当の理由が必要です。それが恩賞で処理されたところに当時の政治的背景、意味がありそうです。

野火止用水も突貫工事でした。承応3年(1654年)玉川上水が完成すると、その翌年、明暦元年(1655年)には早々と野火止用水の開削に着工、年内に完成しています。

承応4年(1655年) 2月10日着工
3月20日完成

40日間と云う猛スピードでした。こうして、二つの用水の超スピード完成について背景を追ってみると、当時の武蔵野の置かれた状況とそれを取り巻く政治情勢が見えてきます。

東大和市域の農民の関与・恩恵

青梅街道の開通、玉川上水、野火止用水の開削は、茫漠たる武蔵野の原を一挙に開発可能地に変える役割を果たしました。青梅新町村の新田開発、砂川新田、小川新田(明暦2年=1656)の開発と相次いで大規模新田が開発されます。

岸村の村野三右衛門(砂川新田開発者)、小川九郎兵衛(小川新田の開発者)氏は、玉川上水の工事に参加したのではないかと云われます。恐らく東大和市域の村々にもそのような動きはあったものと思われそうですが、はっきりしません。

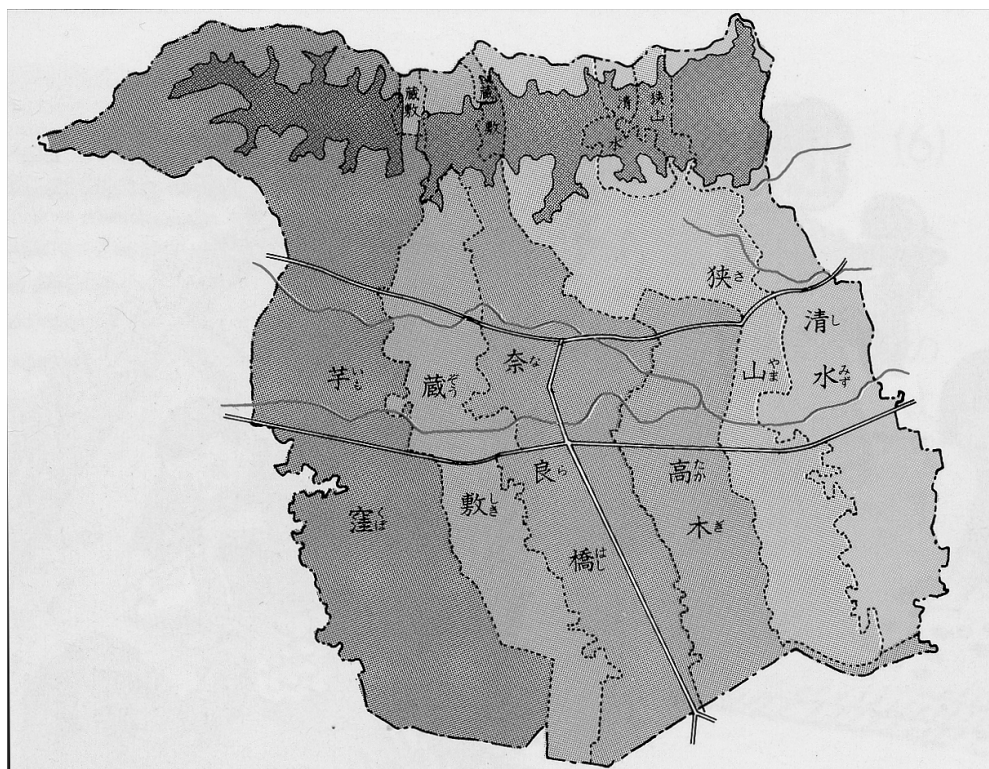
当然、これらの動向を東大和市域の村々の指導者も見ていたはずですが、しかし、東大和市域の村々には野火止用水と接しながら、ついに分水を利用する事ができませんでした。指をくわえた東大和の村々と云えそうです。

IX 新田の開発

谷戸からの開発（万治・寛文）

青梅街道の開通、玉川上水、野火止用水の開削等が行われる背景の中で、東大和の村々も刺激を受けました。また、次第に人口が増えたであろう丘陵の中では、外へ向かわない限り生活の維持が困難であったかも知れません。旺盛な自立を求める2・3男は、そのエネルギーを荒野であった台地の掘り起こしに向けることで、一挙に明日へと燃えたことが考えられます。

そこで、まず、居住地の近くの谷戸の斜面、麓の原から最初の開発が始まりました。それは、すでにあった村に接して、徐々に南に向けて耕地を広げる方法でした。その方法は「切添」とか「持添」と呼ばれます。隣接村との関係、南への限度など、どのように調整しながら進んだのか、全くその過程はわかりませんが、「開墾」という言葉がぴったりかも知れません。



貯水池の中と丘陵の南麓に発生した村々は、そこを根拠に野火止用水まで、せっせと開墾しました。その結果は狭山丘陵を背に南に延びる細長い村ができました。上の図はその村の姿を伝えます。

芋窪村立野の開発

『万治元戌年八月

立野

一、壱反三畝六歩

此取京錢貳百八十六文 夫錢・口錢共

太郎左衛門』

これは「寛永6巳年改本田御検地帳写」で、万治元年（1658）に芋久保村の農民が立野を新田開発し、壱反三畝六歩ずつを25人で平等に分けたという文書です。これで、1658年頃に、現在の新青梅街道付近まで新田開発が進んだことがわかります。

蔵敷村 寛文期 村の独立 享保期野火止まで

蔵敷村の新田開発は寛文期（1661～1673）と享保期（1716～1736）に行われました。

寛文期（1661～1673）

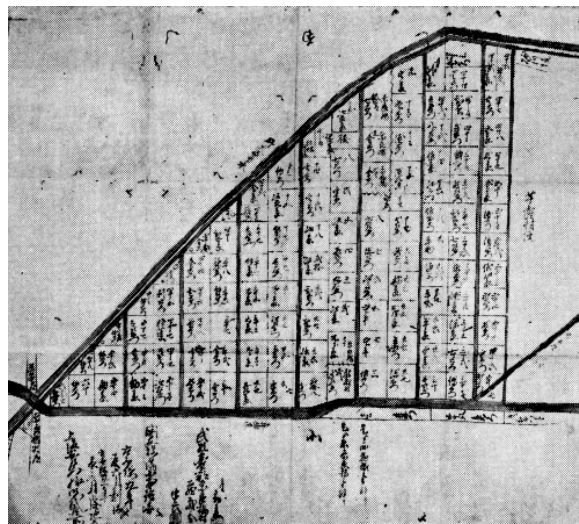
新青梅街道付近まで

享保期（1716～1736）

青梅橋から西方旧青梅街道（現桜街道）、

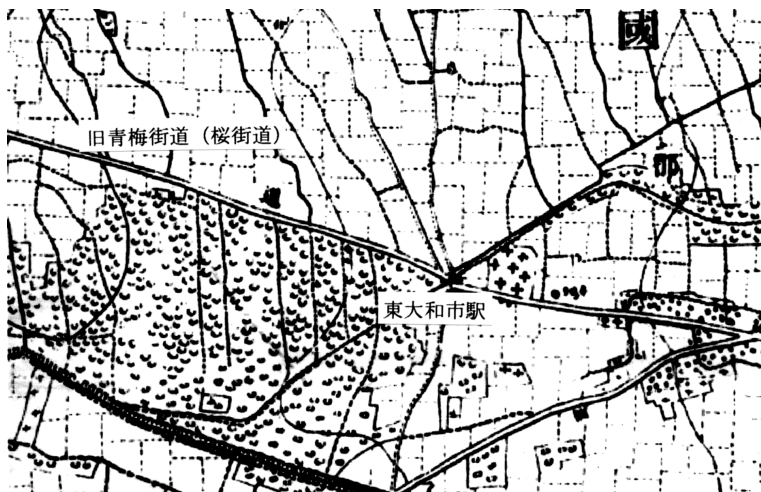
野火止用水のぎりぎりまで

開発されたことがわかります。



左の図は蔵敷村の名主であった内野家に残されている「蔵敷村開発場小前絵図」で、享保9年以後作成と考えられています。そこから享保期の開発は、享保9年（1724）までに終わったことが読みとれます。

蔵敷の新田開発は村を挙げての事業で、新田開発百姓61名中59名が奈良橋村に含まれる蔵敷の人々によって開発され、他村入作者は2名でした。明治14年の東大和駅付近



59名の内34名が従前までの本百姓で、25名が新田開発によって新たに本百姓に取り立てられたものでした。蔵敷は正徳年間（1711～1716）に奈良橋村から分村して「蔵敷村」になったとされますが、新田開発で25名が本百姓に取り立てられたことで、「蔵敷村」が一村として独立したと考えられます。その時期は寛文期と考えられています。

後ヶ谷村

後ヶ谷村の新田開発の状況は寛文9年（1669）、延宝2年（1674）の検地帳によって推測できます。

寛文9年検地帳には、新畑として「砂の台」、「江戸街道向」などの小字名が出てきます。次ページの図のように、現在の新青梅街道付近がこの時期に開発されました。同様に、延宝2年（1674）には、堀際、水道際などの小字が登録され、この時代に野火止用水の近くまで開発が進んだことがわかります。

全村を通して地域的開発の進捗の状況はほぼ同じであったことが推測されます。

芋久保新田・高木新田の開発

芋久保村と高木村の人たちは現在の立川市と国分寺市に、新たに、「芋久保新田」（享保15年＝1730）と「高木新田」（享保9年＝1724）を開発しました。



(東大和市史資料編9 道と地名と人の暮らし p 45)

X 御一新

慶応2年（1866）1月薩・長連合成立。

慶応3年（1867）7月、大政奉還運動（土佐）と討幕運動（薩摩）並行

10月14日、徳川慶喜、大政奉還の上奏文提出。

12月9日、「王政復古」を宣言。天皇親政による新政府が誕生。

慶応4年（1868）3月14日、五箇条の誓文発布。

閏4月21日、政体書を公布。

7月17日、江戸を東京と改めた。

9月8日、明治と改元した。

10月13日、天皇は東京に行幸した。

明治2年（1869）1月23日、版籍奉還

明治4年（1871）7月14日、廃藩置県

新しい御触

慶応4年（1868・9月に明治元年）4月、新しい触書が配られました。「東海道鎮撫総督府」触書といわれるものです（小平町史）。

『このたび陸海軍が諸道から進軍し朝敵徳川慶喜を討伐したが、本人が悔悟謹慎することになったので死一等を減ずることにした。』

京都方に心を寄せる者は今までのことは問わず大いに拔擢する思召である。徳川家の譜代・陪臣、小使に至るまで扶助することになったから士農工商は安心して営業するがよい。

当分は徳川家の法といえども良法は残すのであるから心得違いのないようにし、また諸事訴訟は当総督府へ訴え出るようにせよ』

蔵敷村の高札

蔵敷村の名主は明治元年（1868）11月3日、新しい高札への書き換えを願い出ました。

従前高札場に掲げられていた4枚を取り除き、次のような新しい3枚を掲げました。

1枚目

「人間は五倫の道を正しくせねばならぬ」

「身よりのない者や病人をあわれむこと」

「殺人・放火・盗賊のような悪業をしてはいけない」

2枚目

「何事によらず徒党、強訴、逃散は厳禁、このようなことがあれば早々その筋の役所へ申し出でよ、ご褒美を下さる」

3枚目

「邪宗門はこれまでのとおり禁制」

「切支丹宗門はかたく停止」

村の編成替え（府藩県三治制、廃藩置県）

慶応4年（1868）閏4月、政体書を制定し、それにもとづいて地方支配機構を定めました。全国を府・藩・県に分け、府県に府知事（知府事）、藩に藩知事（知藩事）、県に県知事（知県事）を置きました。

- ・「府」は東京、奈良、大阪、長崎、京都、函館、越後、甲斐、^{わたらい}度会など幕府の重要直轄地
- ・「県」は政府に没収された幕府直轄領や旗本知行地
- ・「藩」は旧大名が支配する藩がそのまま置かれました。



蕨山県印

東大和地域は菰山県と品川県に属した

①代官支配地が菰山県

②旗本領は没収されて、品川県になりました。その結果

1 蔵敷村、奈良橋村、宅部村、後ヶ谷村は菰山県

2 高木村、芋久保村は、旧旗本領が品川県、旧天領が菰山県

3 清水村は新田分が菰山県、本田分が品川県

の所属となりました。

- ・これらは「県」といっても、現在の地方自治体の「県」ではなく、村の組織も、名主、組頭、百姓代がそのまま残り、従前と変わりありませんでした。

狭山村ができた

明治8年（1875）2月、「後ヶ谷村」と現在の多摩湖の中にあった「宅部村」（23頁の内堀）が合併し「狭山村」となりました。

後が谷村と宅部村は独立した村の形をとっていましたが、地続きで、田畑、山林、家屋が入り混じっていました。明治6年（1873）地租改正条例の施行に伴って、全ての土地に地番を付けることになりました。後が谷村と宅部村の入り混みは、隣同士で後が谷村と宅部村に分かれるような状況であり、統一した地番を付けるのが困難でした。

そのような状態の解消もあって両村を合併して、一つの村にするよう、当時の農民87人が話し合っ、申請し、許可されたものです。

村の長が選ばれた（町村の長＝戸長）

- ・明治11年11月、「戸長選挙規制」により、町村の長＝戸長は公選とし、県令が裁可することになりました。
- ・戸長の役割は「行政に従事すると其町村の理事者たると二様の性質の者」とされました。つまり、国家政策の実施者と町村の理事者になりました。
- ・明治12年（1879）3月、各村々に戸長が置かれました。



神奈川県会ができた

「府県会規則」により、明治12年3月、「神奈川県会」が開設されました。蔵敷村の内野左衛門が最初の県会議員に選ばれました。

地方税の内容が決められた

「地方税規則」により地方税は地租割、営業税ならびに雑種税、戸数割の3種となりました。

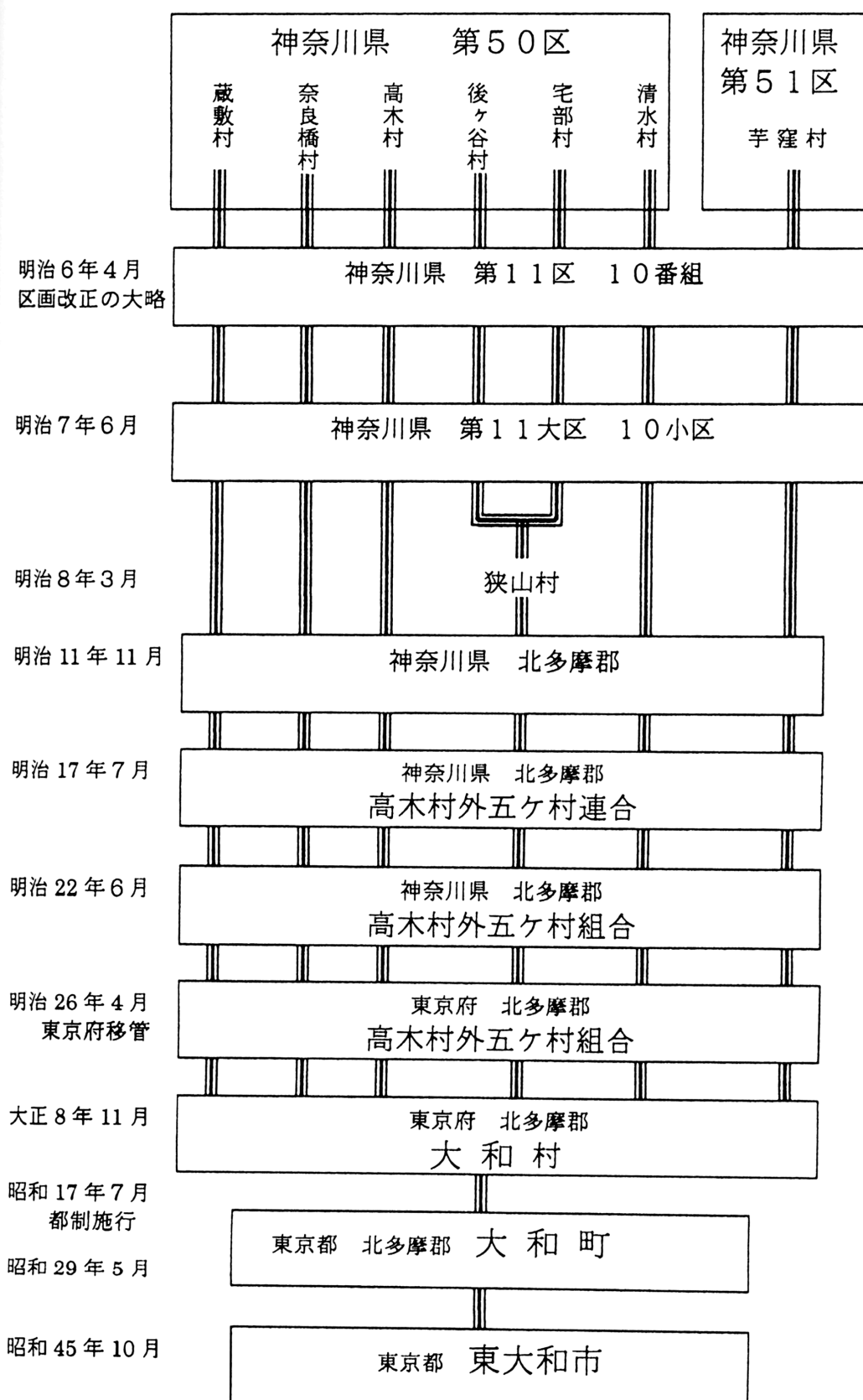
東大和の村々に「村会」ができた（神奈川県町村会規則）

- ・明治12年6月13日、国に先行すること1年前、神奈川県は村に「村会」を置くことを決めました。東大和の村々は明治12年から13年にかけて、各村ごとに村会が成立して、村会議員の選挙が行われ、議員が選ばれました。
- ・村会で議決することは税の賦課、予算でした。地方税の賦課は県から個人に賦課されるのではなく村に割り当てられました。

村山貯水池の建設と移転

明治45年（1912）村山貯水池の建設決定、大正3年（1914）用地買収開始により、住民は貯水池建設大反対運動を起こす中で、事業は進められ、大正5年（1916）住民は長年住み慣れたところから、狭山丘陵の南の原に移転しました。

東大和市ができるまで



(東大和市史 p 256 から引用)

